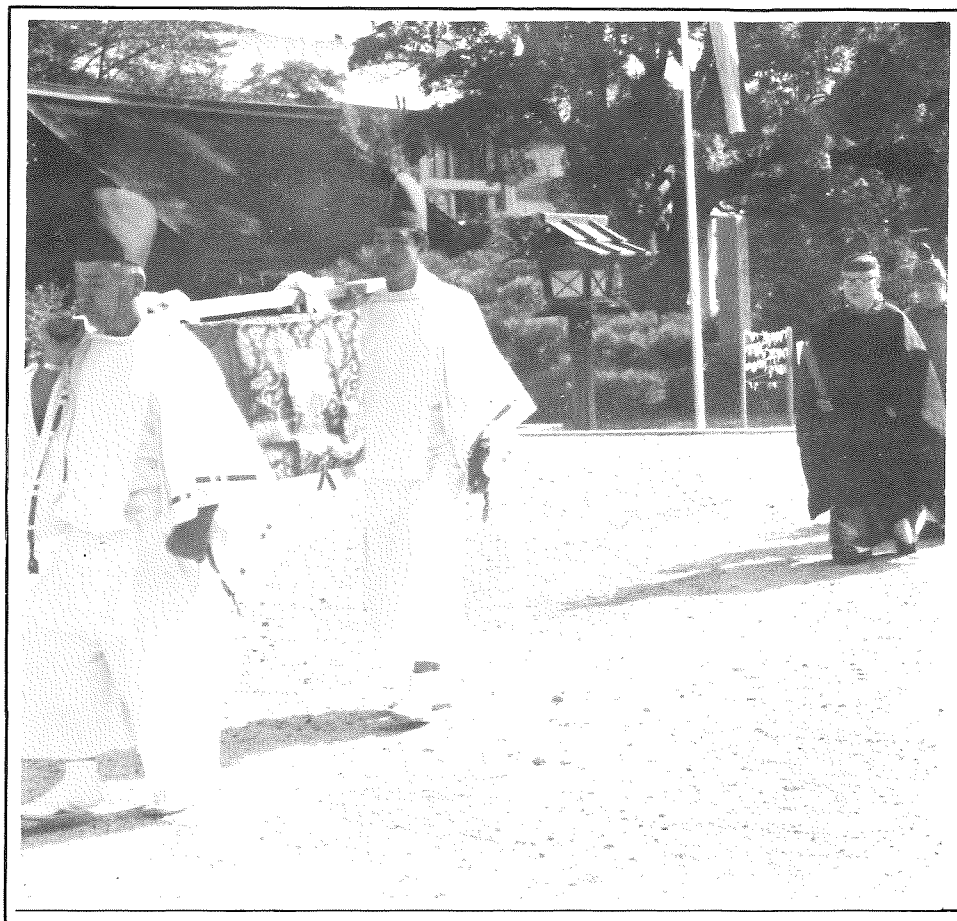
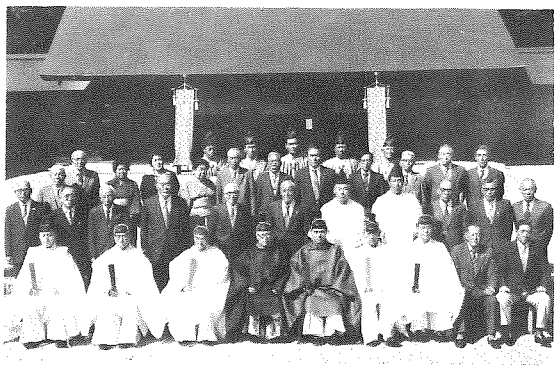


沙沙那美

滋賀県護国神社
社　　報
発　行　所
滋賀県護国神社社務所
〒522 彦根市尾末町1番59号
電　話　0749 (22) 0822
印刷　　田中印刷所

天皇・皇后両陛下幣饌料御奉納奉告祭斎行さる



昨年の昭和五十六年、本県にて第三十六回びわこ国民体育大会が開催されましたが、その秋季大会御臨席のため、天皇・皇后両陛下、滋賀県に行幸啓遊ばされるに際し、当護国神社に幣饌料を賜わりました。

十月十五日午前十時、この旨を大前に御奉告申し上げる臨時大祭を執り行ないましたが、護国の神々様には殊の外御嘉納のことと拝察申し上げた次第であります。

例大祭斎行

昨年の春・秋季の例大祭は、共に天候に恵まれませんでしたが、それでも多数の遺族崇敬者の方々のお参りの中、厳粛且つ盛大裡に斎行されましたことをご報告申し上げます。

春の合祀新祭神

宮治雍吉之命　（本籍　甲賀郡）
小川艶子之命　（〃　伊香郡）

秋の合祀新祭神

中川貞治郎之命（本籍　草津市）
丸橋　彦蔵之命（〃　彦根市）
社納　廣次之命（〃　栗太町）
高橋　繁良之命（〃　犬上郡）
土田　捨造之命（〃　〃）
勝見　勘治之命（〃　蒲生郡）
川村友二郎之命（〃　坂田郡）
大村郁太郎之命（〃　彦根市）
山田　慶一之命（〃　蒲生郡）
脇坂　光雄之命（〃　東浅井郡）
桑原　辰雄之命（〃　大津市）
中川三五郎之命（〃　八日市市）
木村　重内之命（〃　犬上郡）
大河　源二之命（〃　蒲生郡）
松井　庄蔵之命（〃　大津市）

献燈みたま祭

夏のみたま祭も、第五回を数えました。ようやく神社の年中行事として定着して参りましたが、まだ〆ご存じで無い方が多いようです。八月十三・十四・十五日の三日間、午後六時からの祭典並びに点燈式後一斉に点燈される〝みあかし〟を一度ご覧になって下さい。

期間中、可愛い子供たちの紙あんどんも奉納されています。また御神前での御神楽舞奉納も午後四時から受け付けております。皆様方のご参拝をお待ち申し上げます。

◎子供あんどん作品展にご参加下さい。

小学生のお子さんが対象で、あんどん材料は神社で提供します。参加費用は無料です。

ご挨拶

宮司　山本浅次郎

昭和五十六年辛酉の年は宮司山本にとりまして最高の年でありました。一月十三日宮中に於ける御歌会始めの儀に、式部長官よりの御招きにより陪聴の光栄に浴し、宮中正殿松の間にて天皇陛下の御前間近くの席に着きし折、昭和五十年五月天皇陛下当神社に御親拝の御砌り、御先導申上げし事、陛下と私は明治三十四年生れの御同年である事等思ひおこして感慨一入嬉し涙をじっとこらえて草莽の臣山本浅次郎此処にありと胸の中で申し上げた。

三月十日神社本庁に出頭し浄階位を授けられ神職身分一級に昇進致しました。これひとえに御神慮の賜、皆様方の厚き御協力の賜と深く肝に銘じ愈々神勤に励み斯道の興隆に寄与する覚悟を新に致した次第でございます。

十月に第三十六回国体の滋賀県下に開催されるに当り、天皇皇后両陛下十月十二日行幸啓あらせられ、当神社に幣饌料の御奉納を賜わりました。早速神々様に御奉告申し上げる為、十月十五日臨時大祭を執り行いまして神々様におよろこびいたゞきました。かくの如く此一年は神社にとりまして、宮司にとりまして、誠に幸多き年でありました事を御遺族皆様方に御報告申し上げ、共におよろこびいたゞきたいと存ずる次第でございます。

◎御神楽舞奉納受け付け

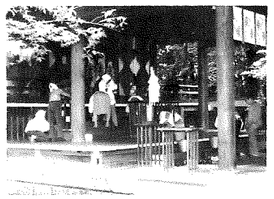
初穂料金壱千円をお納め下さい。みたま祭期間中午後四時から九時まで執り行なっております。いずれも詳しくは神社社務所までお問い合わせ下さい。

境内清掃奉仕年間記録抄

（昭和五十五年七月～昭和五十七年三月八日）

多数の方々のご奉仕、厚く御礼申し上げます。

五十五年
七月　十一日　愛知郡秦荘町婦人部　二十三名
八月　三日　彦根市亀山・金城学区婦人部　六名
十三日　県遺族会青年部　約五十名
みたま祭献燈準備奉仕
十六日　県遺族会青年部　約七十名
みたま祭後片付奉仕
三十日　彦根市花田学区婦人部　五名
九月二十三日　彦根市尾末町老人会　九名
九月二十七日　八日市市婦人部　十一名
十月　三日　草津市婦人部　十名
彦根市遺族会　約三十名
秋季大祭準備並清掃奉仕
五日　彦根市遺族会　約五十名
秋季大祭後片付け奉仕
二十六日　彦根市城南学区婦人部　十四名
二十八日　愛知郡愛東町婦人部　三十二名
愛知郡湖東町婦人部　二十二名
十一月　八日　愛知郡愛知川町婦人部　二十一名



五十六年
三月　七日　彦根市日夏学区婦人部　五名
二十九日　彦根市銃剣道スポーツ少年団　外二十一名
代表松居昇氏
三十日　八日市市婦人部　十四名
四月　三日　彦根市遺族会　約三十名
春季大祭準備並清掃奉仕
五日　彦根市遺族会　約五十名
春季大祭後片付け奉仕
五月　十日　彦根市高宮町婦人部　十三名

六月　八日　彦根市尾末町老人会　十二名
十五日　犬上郡多賀町婦人部　二十八名
二十四日　愛知郡愛東町婦人部　二十八名
七月　三日　愛知郡湖東町婦人部　十九名
二十九日　守山市婦人部　三十三名
八月　二日　彦根市亀山学区婦人部　四名
十三日　県遺族会青年部約七十名
みたま祭献燈準備奉仕
十六日　県遺族会青年部　約百名
みたま祭後片付奉仕
九月八日　彦根市尾末町老人会　十名
十三日　彦根金亀レオクラブ　八名
三十日　八日市市婦人部　十四名
十月　三日　草津市婦人部　十一名
彦根市遺族会　約五十名
秋季大祭準備並清掃奉仕
五日　彦根市遺族会　約六十名
秋季大祭後片付け奉仕
十九日　愛知郡愛知川町婦人部　二十七名
二十日　彦根市城南学区婦人部　十四名
十一月四日　愛知郡秦荘町婦人部　二十二名
五十七年　三月　八日彦根市日夏学区婦人部五名

山本宮司神職身分昇叙さる

当神社山本浅次郎宮司には、昨年神社本庁より浄階位並神職身分一級を授与される光栄に浴しましたが、その祝賀会を五月十日執り行なわさせていただきました。

宮司御神前に昇叙のご奉告

小林隆崇敬者総代、守田厚子県遺族会長、諏訪三郎奉賛会長夏原平次郎彦根市商工会議所会頭・遠崎成吉彦市議会議長・加藤重三彦根市観光協会長の各位が発起人となり、献身的なご努力をいただいて、当日には参会者百五十名になろうとする多数の方々よりの心暖まるご祝意を頂戴致しました。

当初、身内だけでささやかにと考えておりましたのに、思いもかけない盛大な祝賀会となり、関係各位の皆様方のご厚志に深く感謝申し上げますと共に、〝これ偏に神々様の御陰〟と…宮司は齢八十才を超えてなお意気盛んますます神勤に精励する模様でございますので、皆様方におかれましても、神社護持につき、今後尚一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

雪害による修理工事のご報告

三十八年以来の豪雪と言われた昨年は、雪国に過酷な爪痕を残しましたが、当神社も例外では無く、多大の損害を被りました。特に屋根瓦の損傷甚だしく、斎館、社務所の瓦はズリ落ち、棟は波を打つ有り様で、雨漏りの音はまるでオーケストラのようでありましたので、付帯工事も含め費用約三百万円をかけて、雪止めをさらに一段増やし、土を入れ替え、瓦を全部締め直す工事が、三月二十三日の工事奉告祭の日より約一ヵ月に渡って行なわれました。

なお、土蔵の雪害による壁塗り替えの修理費用は、みたま祭関係諸道具が土蔵に収納されているということで、県遺族会青年部に負担していただきましたことを申し上げ、ここに改めて御礼申し上げます。

永代命日祭

国難に際し、尊い御命を棒げて、今日の平和の礎となられ、現在では我が国土の守り神として当護国神社に坐します大神様の御前で、日々の祭典、月々の月次祭・春秋の大祭等多くの祭典を執り行なっております。

この恒例の諸祭典とは別に、皆様方のお申し出によって慰霊の祭典を特別にご奉仕致します永代命日祭は、御祭神のご遺族及びその関係の方であればどなたでもお申し込みになれます。御祭神の由縁の月または日に永年に亘り祭典は執り行なわれます。

永代命日祭お申し込み者芳名
（昭和五十五年十月～五十六年十二月）

守山市　今江みき枝様
守山市　下村　はな様
守山市　今江　しず様
守山市　今井　みつ様
守山市　中島　ふみ様
守山市　葭田　捨吉様
守山市　中嶋　トミ様
守山市　竹之内すが様
守山市　高谷　しな様
守山市　今井平治郎様
守山市　今井　ちゑ様
守山市　芝原　さの様
守山市　葭田亀太郎様
彦根市　寺村　利助様
野洲郡　橋本源四郎様
野洲郡　高谷みね尾様

昇殿参拝の永代祭参列者

千葉県　嶋瀬　琴様
高島郡　大谷あさゑ様
甲賀郡　澤井　辰次様
彦根市　佐藤　ひで様
甲賀郡　伊地知富次郎様
東浅井郡　速水とく代様

永代命日祭について詳細は社務所までおたずね下さい。

散策（三）

今回は拝殿に向かって左側、土蔵の前の植え込みに建っている「戊辰従征戦死者碑」をご紹介致しましょう。

当神社の前身である招魂社の最初の御祭神・青木頼實之命始二十六柱の御名を記して後世に伝えようとした碑です。

井伊直憲　題額。谷鐵臣　譔。日下部東作書。……中　略……

明治廿九年九月　多川雅吉　刻。

幾度かの移転の後この場に建てられたのでしょう、数ケ所欠けています。それに風化の為かそろそろ、字が読みにくくなっていますので、先年拓本を致しました。

洋上慰霊に参加して

森　定次郎

今回発刊される県護国神社社報に宮司殿の御厚意により、私が洋上慰霊祭に参加した時の感想文をとの御求めを受けまして、大変恐縮に思いましたが、英霊の御導きかと存じ潜越乍拙文を記し私の感激した洋上慰霊行とさせて頂きます。

昭和五十五年十月九日博多港を出港した洋上慰霊船「さくら丸」は、全国各地からの参加者男二百二十六名、女二百八十四名計五百十名の慰霊団を乗せて、比島・台湾・沖縄海域洋上慰霊の途についた。

あの太平洋戦争中無念の涙をのんだ艦船三千二百余隻、いまなお四十万の陸海軍人軍属が万斛の恨を残して海底に眠っている。〃さくら〃が向かおうとする沖縄・台湾・フィリピン海域には約八百隻十二万人の戦没者（厚生省調べ）あり。

今回の洋上慰霊発起人代表団長渡辺守さんは空母千歳の生還者で、この慰霊計画には筆紙に盡し難いご苦労があった。埠頭で結団式の時「皆さん、やっと船出が実現します……」見るからに朴訥で誠実味あふれる方で、感激のあまりだろうあとは声にならなかった。聞く我々もまた今日の日をどれだけ待ったか、団長さんの気持が切々として身に伝わってくる。

翌十日台風十九号の発生により進路変更して逆コース香港にと向かった十一日、十六時三〇分より第一回洋上慰霊祭が後甲板（約三〇〇平方米）で開始される。地点は沖縄・宮古島の北北西三百九十キロ〃さくら〃は右舷斜うしろから十五メートルの風を受け、皆大きく足を踏張って式典に参列した。正面中央に「戦没者之霊」と墨汁に金泥で書かれた位牌。両側に大きなローソク。そして船尾側の壁面に黄・緑・赤の樹脂の造花で飾られた艦船名の卒塔婆が吊り下げられてある。遺族戦友たちは、卒塔婆に合掌しつつ、この日のために心をこめて持参した品々を供えて、たちまち位牌のまわりは供養の山となった。

未亡人の方たちは亡き夫に再会するかの如く皆様美くしく化粧して、喪服に身を包みネックレスをつけ結婚指輪を光らせている人あり。皆さん精一杯の装いをしておられる。

十六時三十分式が始まった。参列の遺族、戦友の髪が、喪服の裾が翻るほどの強い風だ。船は左右に大きく揺れる。

献茶が京都の谷美津代様から僧侶に渡され祭壇に献じられた。

「昭和五十五年十月十一日私達洋上慰霊団五百十名は、本日只今、南西諸島及び沖縄・東支那海海域に参りました—」

渡辺団長が慰霊文を朗読し始めた。風は更に激しくなった。吹き消されまいとする声はくぐもり。絶句、涙が落ちる。頭を垂れ、数珠をまさぐる人々の嗚咽もやまない。慰霊の言葉は続く「…日本の勝利を信じ、日本の繁栄を願い、護国の鬼となった戦艦大和、巡洋艦矢矧を始めとした沢山の日本海軍の艦艇及び陸軍輸送船乗組の皆様、航空機塔乗員の皆様に捧げます。戦後三十五年という永い間、日本恋しい、日本人に会いたい、日本に帰りたいと叫び続けておられたでありましょう。今日やっと念願叫って皆様の眠っているこの海面に参りました。どんなにか辛かったでしょ。どんなに冷たかったでしょう。どんなに待ち遠しかったでしょう。

大海原を覆っていた黒雲が開いた。南の明るい太陽が現れた。霊が聞いているかのように—。　そこだけが明るい甲板で慰霊の言葉は続く。

……三十五年間、お迎えに参らず本当にすみません。お許し下さい。海底の皆様見て下さい。この慰霊船には、あなたたちのお父さん、お母さん、そして奥様や可愛かった子供や生れたばかりの子供達が。こんなに大きくなりまして、一人前になっております。御兄弟や親類の方、沢山の戦友がお迎えに参りました。

戦争には負けました。然し皆様の尊い犠牲のおかげで、皆様がビックリするような経済復興と新しい憲法の下、平和な毎日を送っております。この海面で一日でも二日でも停泊して皆様の供養をして上げたいと思いますが。切り詰めた時間で本当に申訳ないと思います。皆様方を再びこの海面にお迎えに来られない事と思います。どうぞ、私達の肩に、そしてこのさくらに乗って帰ろうじゃありませんか。終りにテープを投げますので、テープに伝って日本に帰りましょう。一億一千万人の待つ日本に帰りましょう」

この団長の慰霊の言葉に皆は嗚咽した。慰霊団全員の気持が表わされている。どんな美辞麗句よりも英霊に通ずる慰霊文だと私は感激した。

祭典が終り艦船名の卒搭婆がそれぞれ遺族の手に渡された。海に向かって大きな声を張り上げ〃おとうちゃん〃〃あんた〃と呼ぶ未亡人肉親戦友の声は洋上にこだました。投じられた卒搭婆や供物は波間に浮かびつつ後方に流れて行く、外舷の手摺に顔を伏せ身もだえする婦人あり、この慰霊風景は各慰霊海面に続いた。戦争の悲劇が痛切に感じられる場面であった。

十月二十三日十四日間の慰霊を終って解散式の後多くの末亡人の方々が次

々と団長様に感謝の言葉を交し握手をしておられたが、中には嬉しさのあまりか感極まってか、団長の手を握りポロポロと感激の涙を団長の拳に落しておられるのを見て、私は何んと美くしい風景だろうかと今も私の印象に深く刻まれている。

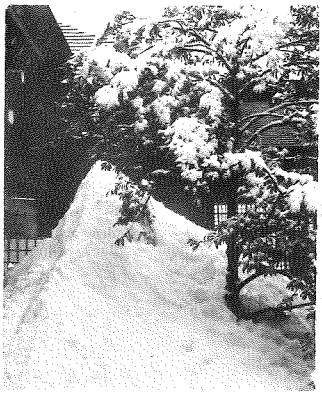
拙い一文を呈して私の洋上慰霊行感激の記とさせて頂きます。

昨五十六年十一月十二日より十二月二日の二十日間、中部太平洋ソロモン海域に、海交会主催の洋上慰霊に参加いたしました。

両海域戦没英霊の慰霊をさせて頂き、戦後三十有余年にしてかっての激戦地幾多の戦友眠る海域や古戦場を訪れ慰霊させて頂いた事は、英霊のお導きだった。慰霊を通じ、偶然と言えない不思議を幾度となく感じました。

謹みて護国神社に神鎮る英霊に感謝申し上げます。

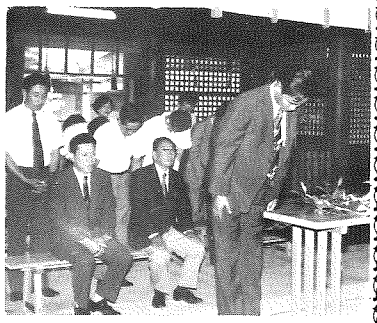
五六豪雪！御垣内の御屋根からの雪は二メートルを超えました



○本寄稿文を書かれた森定治郎氏は、毎早朝ご参拝になります。氏の頭の中から亡き戦友のこと、ご英霊のことが片時も消えることはありません。自費で、独力で亡き戦友達のことを後世に伝えようと色んな作業をなさっておられます。戦跡慰霊巡拝もその一つです。

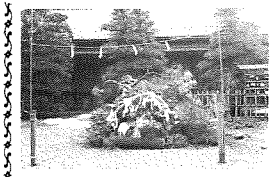
昨年十一月、洋上慰霊に行かれたのを機に、かねて一文をお寄せ願いたいと思っていたので、本年二月に思い切って申し上げた。当初固辞されたが、是非にとお願いして、短期間にもかかわらず本社報に間に合わせていただいた。内容は期待に違わず、臨場感に溢れ、心の籠った素晴らしい文章です。

森氏の本業は大工さんですが、その傍ら、良き理解者を得て近々、長年の資料をまとめて本を刊行される由、ご成功をお祈りします。また、今回は紙面にも限りがあり十分意を尽せない部分がおありだったでしょう。いずれまた折をみて続篇をお願いしたいと存じます。

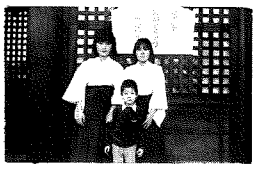


彦根市遺族会青年部大会
第1回開催奉告祭（6月21日）

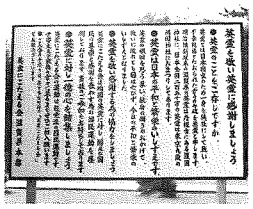
正月



点火を待つ大かがり火



県遺族会新年祈願祭



英霊にこたえる会の
大看板設置される

よい子の
七・五・三まいり

編集後記

○社報「沙沙那美（ささなみ）」第三号をお届け致します。遅れての発行で、申し訳ございません。

○昨年は、本篇記事にもあるように、宮司の祝賀会・臨時大祭を始め多くの行事・出来事があり、一年の月日が非常に短く感じられる年でした。しかし、それのみを理由に社報を今まで遅らせた訳ではありません。皆様方のお手元にお届けする郵送料がバカにならないのです。そこで、今回は思い切って遅らせ、一応五十六年度内に印刷が出来上る段取りをつけて、春の大祭当日、ご参拝の折にお渡しすることに致しました。そうすれば郵送料が大幅に助かることになるのです。

○本社報は従来、遺族会の郡市町村並婦人部・青年部の支部長様方及び神社みたま祭ご協賛各位・特別関係の方々にお届け致し、一部は神社へご参拝の皆様方へお渡ししております。ですから、これを受け取られた支部長様方は、ご面倒ながら、会合の際にでもご回覧いただいて、出来るだけ多くの皆様方にお目通し頂き、護国神社の行事活動をご理解願えるようご協力下さることをお願い申し上げます。

（祢宜山本記）